

# 熊本・徳永直の会会報

第20号

「中学生」になる孟宗忌

―今年は二月十二日に―

昭和が終ってみると、徳永直という作家は昭和の作家だったなあと、あらためて思う。芥川龍之介が大正の作家だったのとはまた違っていて、昭和は複雑な時代で、前半の三分の一と後半の三分の二があり、その後半の三分の二がまた六〇年を境に前後に二分され、その前半すなわち六〇年安保前後ともいえる一九五八年二月一五日に徳永直は亡くなったわけだが、価値観の大変動時代をも見事に乗り切って作家活動に終始したのであった。晩年の大作「静かなる山々」が朝鮮戦争前夜で未完のまま終わったのは残念でならないが、戦前戦後をまたいだ作品系列、たとえば「黎明期」と「黒い輪」、「冬枯れ」と「にがい睡」など、昭和という時代の二面性をいみじくも描きわけている。まさに徳永直は、文芸を通しての昭和の証人であった。熊本での徳永直顕彰も十二年目を迎える。文学碑が建ったとき生まれた子どもが小学校を卒業する。ここで改めて徳永文学を讀もうではないか。

(中村)

改元所感

玄峰 森上幸義作

天地浩然而久悠

天地は浩然として而して久悠

人間狭隘更馳道

人間は狭隘にして更に馳道

偽真刮目可明察

偽真は刮目して明察すべし

寛博堅持継後儔

寛博堅持して後儔に継かん

第十二回孟宗忌御案内

二月十二日(日)午後二時半〜三時 文学碑前

徳ぶ会 熊大構内 三時半〜四時半 会費三百円

## 「最初の記憶」を読んで

日野美保

作者は自分の「労働生活」の最初の記憶として、幼少期にまで逆のぼりその体験を述べている。私はその労働の記述の中に、作者の愛情を感じる。何に對する愛情かと問われると返答に困ってしまうし、どこにその愛情が表現されているのかと聞かれても答えられない。が、作者のとても優しく温かい心が、作品全体から感じられて仕方がないのである。

△私Vは小学校へあがる頃にはすでにいっぱしの竹細工職人であった。学校では友達にからかわれて、母に仕事をすることを拒んではみるが「結局は働かねばならんことを知っていた△私V。年齢的には夢や理想を小さな胸にたくさん抱えている頃だろうに、しっかりと現実を見つめている△私Vは、決して消極的でなくむしろ積極的な人間であろう。あきらめのようなものは感じないし、何か現実と堂々と向かい、それを打破していこうとする人間の強さみたいなものを感じる。

母は労働に對しては厳しく、また誇りを持ち△私Vにもそれを伝えていった人であった。朝市場で竹箸を売った後、△私Vを連れて茶小屋に寄り銭を数えて溜息をつく母の姿を描いてあるが、「母の溜息にいろんながあるのを知っていた」△私Vは本当に母親を愛していたのだと思う。饅頭を食べさせてくれ、いちどに戻ってくる母の愛情におぼれそうになる△私Vだが、その愛情を感じるのとは逆に自分も母に愛情を注いでいるからではないだろうか。文章の中に

は「私は母を愛している。」といったような表現は一つもないが、母を愛しているからこそ、何気ない言葉や仕草の端々に母の△私Vに對する愛情を感じる事ができるのだろうと考える。

また、弟と二人で「赤」を連れて荷物を運ぶ場面があるが、ここでは「弟が可哀想だと思えば思う程、私はよけい腹がたってきた」という一節に私は弟への愛情を感じた。雨に降られてどうしようもなく、△私Vは自分の力のなさが悔しかったと思う。それをどうしようもなく弟にあたってしまった。弟が可愛いければ可愛いほど、自分の無力が切々と感じられて、弟に腹を立てながら本当は自分に腹を立てているのであろう。

「赤」に對しても同じで、尻をたたきながら自分の無力を感じるのかもしれない。最後にはとうとう「赤」の平首に弟としがみつきたがりますが、この場面は△私Vの切なさやしみじみと表れていて胸がしめつけられる思いがする。

私は作者が「労働」という一見物理的・肉体的なものを通して、「愛情」という精神的なものを訴えているような気がする。つまり「労働」が人間の精神的な成長を導きだすのだということを訴えているのではないかと、思うのである。最後に作者は、「労働のもつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないしは消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである」と述べている。これが、すなわち人間の心の成長を指すのではないかと考えるわけである。

(熊大養護教諭特別科学生)

# 瀕死の老人

木庭克敏

深い森の中によこたわった老人は  
 まさに死のうとしている  
 シーツに投げだされた指先から  
 人の鮮血をしたたらせながら

一たびその指が玉座の上で空(くう)をきるや  
 おびただしい血潮が

浪費されない訳にはゆかなかった  
 連綿と続く老人の家系と

それにつらなる(と称せられていた)

家族達の種と名譽を

保存するという理由によって

そのまわりを

頭(こうべ)うなだれた者がへめぐる

無数の白骨を水底に沈めた沼

渚で光の粒子をはじきかえす波紋は

今も青い影となって反映しているのか

老人の名が囁かれるたびごと  
 人々のあらゆる筋肉を硬直させ  
 体内をつらぬいて流れた電磁波は  
 一体どこへ消え失せたのだろうか

死を賭して抵抗した者達の功業を  
 あまり気にもとめない心は  
 人々に多すぎる死をもたらしした犯罪をも  
 とかく忘れやすいものだ

死の行進を先導した白馬は  
 今またかさなりあった森の梢をとうして

ハイテクと消費の国の空高く  
 天翔けようとしている

森の中にもうけられた聖域で  
 老人はまさに死の床についている

赤黒い血がしみこんだ指先を  
 シーツの上に投げだしながら

## 訂正

前号の沢田博行氏の「赤い風船」の第四連にミスがありました。  
 た。誤ー希望はネガの先。正ー希望はネガの光。

# 魔女

沢田博行

月を眠らせ  
 波を呼び  
 緊縛の鎖が  
 星を襲う  
 魔法をかける  
 宝石の杖  
 階段の目を盗み  
 ガラスの靴を穿く  
 ネズミの尻尾  
 トカゲの足  
 鏡の中に  
 愛をとじこめる  
 時代が卵巣の中で  
 札束と受胎し  
 死を孕む

ポケットベルを

踏み潰し

かぼちゃの馬車が

待っている

鶏冠の上から

灰をかぶった

粉屋の娘

## 事務局だより

△ 会報が遅れたと書くのがいやになった。これはもう重症である。輸血が一番いいのだが、宮内庁にでも頼んでみるか。

△ 一月十三日に第十二回孟宗忌の準備会と会報の編集会議を開いた。その席で、今度の孟宗忌が終わったら徳永直文学散歩と座談会を持つという話がでた。徳永会の折煮つめたい。

△ 徳永会がテントでなくなったので淋しい。

○会報に原稿を……どんなささいなことでも徳永直に関する文章や情報をお寄せ下さい。

熊本市黒髪二一四〇一一 熊本大学教育学部中村研究室

電話(〇九六)三四四二一一(代表)内線二五八四

振替 熊本四一一四九八番 熊本・徳永直の会